

努力はぼくを裏切らない

岡山県

福田道場

小学6年

尾池一成

「一、二、三、四…。」

ぼくは時間をみつけては、素ぶりをしている。ぼくが素ぶりをするようになったのは、ある日の出来事がきっかけだ。

ぼくは小学三年生の時に県の大会で優勝し、強化選手に選ばれた。それ以来、ぼくは六年生の大会で代表メンバーとして試合に出ることを目標の一つにしていた。八月、試合に出るメンバーが発表されたが、そこにぼくの名前はなかった。『何でだろう？何がぼくに足りなかったんだろう？』初めてぼくは、こんなにも悔しい気持ちになった。その日のけい古は自分自身のどうしようもない気持ちをおさえるのに必死だった。けい古の後も悔しい気持ちが込み上げてくると共に、いつも剣道を教えてくれている父や、剣道を応援して送り迎えをしてくれている母のことが頭に浮かんだ。『きっとお父さんにもお母さんにも怒られるんだろうな…。』迎えに来た母を見て、

「お母さんごめん。ぼく代表選手に選ばれなかった。」

と言った。すると母は、

「残念だったね。でもその結果が全てじゃないよ。」

と言った。ぼくは母の声を聞いて、泣くのをグッとがまんした。

その日、剣道の七段のしん査に行っていた父は、帰宅するとうれしそうに、

「七段のしん査合格したよ。」

と報告してくれた。ぼくは、うれしそうにしている父を目の前に、すごく言い出しにくかったが、

「代表選手に選ばれなかった…。」

と一言だけ言った。すると父は、

「努力は裏切らない。悔しいなら努力しろ。」

と言った。今まで何度も何度も両親からは、

「試合に負けて悔しいなら努力しろ。」

と言われてきた。しかしぼくは、『けい古の時は、一生けん命がんばっているから大丈夫。』と自分に言い聞かせては納得し、何か言われれば言い訳をし、気付けば負けっぱなしになっていた。

「このままではだめだ…。」

どんなに周りがサポートしてくれても、身近に全日本選手の父がいても、やるのは自分自身。

今までの自分が情けなかった。

ぼくから見た父は、四十歳になり、体力も限界だと言いながら、自分を追い込み努力をしている。父は、『努力する姿』をぼくに背中であげてくれている様に思えた。しかしぼくは父に、「剣道を教えて。」「ぼくも一緒にやる。」という言葉を一度も自分から言ったことがない。父が今まで自主練を強要してこなかったのは、自分が努力をすることの大切さに気付かなければ意味がないと思っていたのだろう。この時何かぼくの中ではじた。『口より行動。行動で見せたい。』と。

そして、この日を忘れないようにぼくは、素ぶりをする竹刀に『努力』と書き、さらに日にちを書いた。最初は、百回もすれば手もかたも痛くてろくにふれなかった竹刀も、今では千回ふれるようになった。竹刀をふる時は集中し、あの時の悔しさをバネに力強く、そして速く一本一本気持ちをに入れてふっている。苦しいなと思ったら父の言葉を信じ、父の背中を目標に、いつか父に認めてもらえると信じ練習をしている。そして、ぼくが父をほこらしく思う様に、父にいつかぼくのことをほこらしく思ってもらえるようになりたい。

県の代表選手には選ばれなかったけど、今のぼくがあるのはこの出来事があったからだ。ぼくには必要な出来事だった。何より、ぼくは剣道が好きだ。だからこれからも「努力は裏切らない。」という父の言葉を信じてがんばっていきたいと思う。そして、剣道はぼくに「気付き」を教えてくれ、父とぼくの気持ちをひとつにつなげてくれていると再確認できた。必ずいつか、父を追いこしたい。